

Activity Report

バスクの若手アーティストの日本滞在制作の活動記録(その3)

AIR と美術大学の協働 2022

Young Basque Artists' Residency in Japan Part. 3

A Collaboration of AIR and Art University

Contents

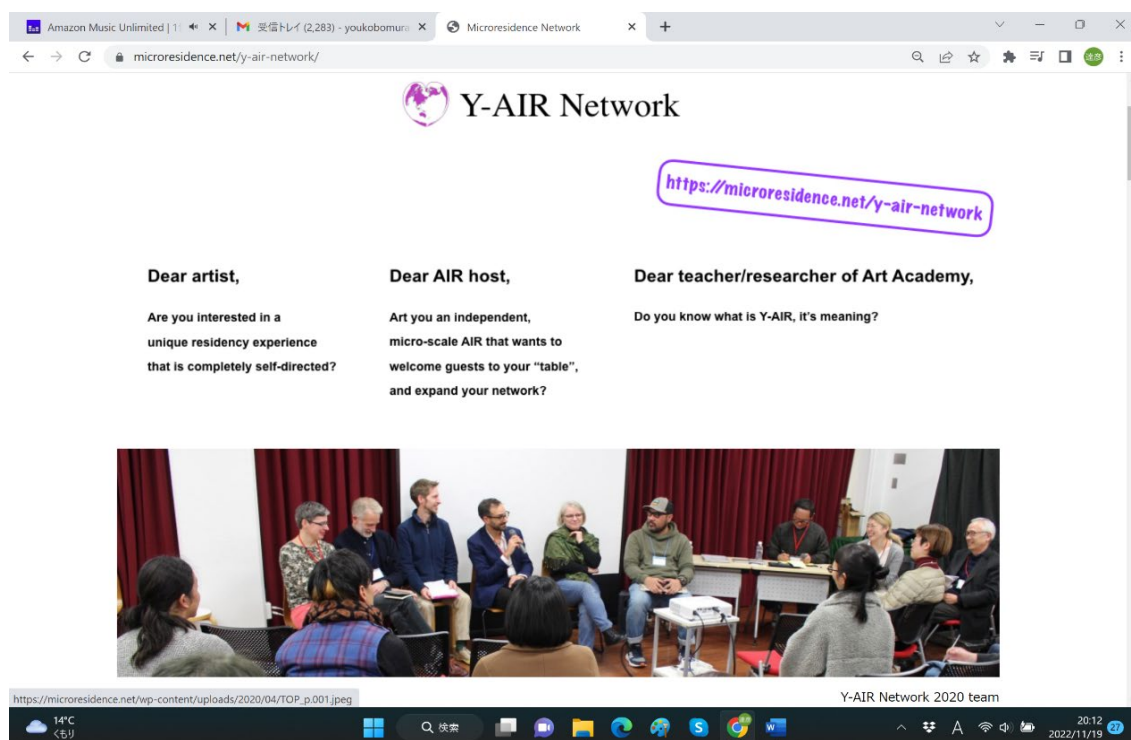
まえがき	01	Foreword
寄稿「風の訪れ」	02	“The wind comes”
活動概要	03	Overview
活動報告	04	“Dystopia”, essay from the artist

2018 年から始まったスペイン・バスク自治政府支援下でのバスク若手アーティストによる日本滞在制作活動プログラムは、継続 3 年目にして COVID-19 パンデミックにより中止を余儀なくされた。日本政府の海外渡航者受入れ原則禁止となり決定され 2 年がたった。2022 年に入りコロナ対応の国内体制が整ってきた背景の基で、渡航受入れの緩和が始まったタイミングに、このプログラムの現地調整役 Urtzi Arriaga Argote 氏より 2022 年 3 月メールが入った。2 年間閉鎖状態であった遊工房アートスペースのレジデンス運営再開の準備が始まった。

政府の受入条件として、受入意思が明確で受入態勢が整い、受入責任者が明確である場合のビジネスと留学活動に関してのみ、責任者からの保証書の提出を経て、渡航予定者の健康とコロナ対応のワクチン接種証明がとれる場合に受入可能となった。

遊工房においては、AIR と美術大学とで協働する各種の活動を実践してきており、この条件をクリアすることには支障はなかったものの、渡航者と共に地域でのコロナ対応策に関しては正直、暗中模索の状況であった。コロナ撲滅とかコロナと共存と語られているが、先の長い社会問題として、生活者の一員であることを意識して新たな活動を進めた。

パンデミックがもたらした世界規模の社会変化、人々の感性の変化が語られているが、異文化に交わり、違いを受容できる相互理解の社会形成の基は、人の交流は、直接の対面が重要な要素であることは、コロナ以前と変わるものではない。レジデンス運用再開の礎と考えている。2012 年頃より国内外の美大教官とマイクロレジデンス運営者との試行錯誤で始まった「Y-AIR, AIR for Young」の実践活動の再開と新たな活動への展開に期待したい。



風の訪れ

日沼禎子 | 女子美術大学 教授

2020年の世界的パンデミックから2年、「withコロナ」、「新しい生活様式」という言葉が生まれ、リアルとバーチャルのコミュニケーションを両立し、決して止めることのできない時間の中で行きつ戻りつを繰り返しながら、私たちはそうした困難さの中にも、想像力を駆使し、日々の生活をどうやって柔軟に過ごし、そして新しい出会いを生み出して行くのかを模索している。つまりそれは、すべての人にとって、クリエイティビティが求められる好機であるとも捉えられるのではないかと、とも思っている。

アーティストによる国際間の移動をとまなうアーティスト・イン・レジデンス(AIR)は、その活動、あり方、活動の根幹に大きな揺さぶりをかけられ、多くのアーティスト、AIR 事業者はプログラムの中止、延期を余儀なくされ、その活動の歩みを止めないための試みとして、オンラインでの実験的な取り組みなどが見られた。このことは、アーティストにとってのリサーチ方法、主催者またはコミュニティとのコミュニケーションの新しい可能性を発見する機会ともなり、欧州などでは、AIR 本来の根本である移動を伴うアーティストの活動ではなく、オンラインでの展開をすることによって、自然エネルギーの削減、環境問題への働きかけにもつながるのではないかと、グリーンエネルギーをなぞらえて「Green AIR」という名称を使った議論も起こっていた。しかし、旅への欲求は枯渇することはなく、皆が、国境が開かれ、自由な移動ができるその時を待ち望んでいたのである。

その最初の「風」は、スペイン、バスクから訪れた。2018 年より遊工房アートスペースでは、バスク州政府主催の若手アーティストを対象としたアワード「Ertibil Bizkaia」による副賞として、日本での AIR の機会を得たアーティストの受け入れを行っており、アーティストの滞在制作の充実と若い学生たちへの教育の機会として、女子美術大学との連携プログラムを実施してきた。2年間のプログラム休止期間を経て、2020-21 年の受賞アーティスト、計6名が派遣され、うち Daniel Llaría を遊工房で、また Natalia Suarez Ortiz de Zarate を、今年度より試験的にスタートした「JOSHIBI AIR」プログラムとして本学での滞在受け入れを実施し、各拠点での滞在制作、オープンスタジオに加え、大学の授業にゲスト講師として招き、学生たちとともに、アーティストトークを開催するなどさまざまな展開を行なった。アーティストにとっても、受け入れ側にとっても、人と人とが直接出会い、同じ時間を分かち合いながら過ごす時間は、何よりもかけがえのないものであるとあらためて実感する機会となった。加えて、「Ertibil Bizkaia」実施 40 周年記念とし、PARADISE AIR(松戸)、黄金町アーティスト・イン・レジデンス(横浜)に同じく滞在したアーティストとともに、アーツ千代田 3331 でのグループショーが開催され、その成果を広く公開される機会も設けられた。

2022 年も残すところあと数ヶ月となった今、日本国内でも海外からのアーティストも参加しての文化イベントが盛んに開かれている。国際的なアートシーンにおいても、今年はヴェネチア・ビエンナーレ、ドクメンタなどの世界大規模の芸術祭が開催されたことも記憶に新しい。一方で、国家間の紛争が起き、多くの人命が奪われ、難民として国を逃れる人々もいる。AIR は、古くからアーティストたちにとってのシェルターとしての役割もあったという。私たち AIR を運営する者は、移動しながら制作を行うアーティストたちが安全に、安心して創作できる環境をつくるとともに、異文化への理解と交流を通して、世界の平和のために少しでも貢献できると信じている。いつまでも風が吹く、新しい空気(AIR)の中で、人間が心身ともに健やかである世界を目指して。

活動概要 Overview

1 プログラム概要 About the Program

スペイン・バスク自治政府の若手アーティスト支援 プログラム「ERTIBIL BIZKAIA」受賞者の日本における AIR 機会の協力要請を受け、AIR と美大の協働する Y-AIR 活動の一環として、遊工房アールスペース(東京)と女子美術大学アートプロデュース日沼研の協働で、2013 年以来、女子美術大学との協働で、講演やワークショップ、インターンシップ等を実施してきた。回を重ねるごとに充実した活動を展開している。

本プログラムは 2018 年からはじまり、遊工房アールスペース、黄金町 AIR、Paradise AIR、Studio Kura で受入実施。

3 年目は、COVID-19 によるパンデミックで 2 年間途絶えた後の再開として、遊工房 AIR と、女子美にて新たに始まった「女子美 AIR」とで 各 1 名のアーティストを、7-8 月の 2 ヶ月間の滞在制作・交流プログラムを実施。また、帰国前の成果報告会も実施した。

2 活動概要 Summery of activities 2022

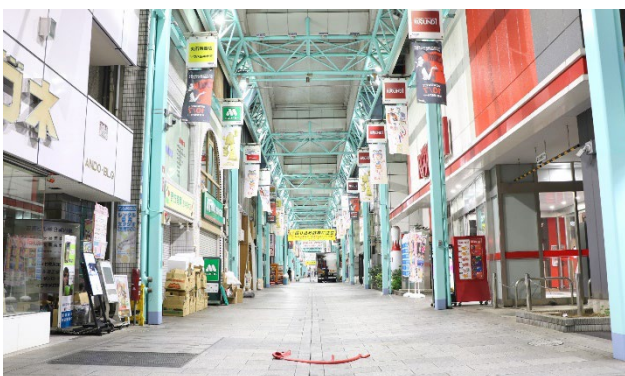
ダニエル・ラリア Daniel Llaría

2009 年 University of the Basque Country 美術科卒業、その後 2017 年 The New School for Design, New York 修士。欧米を中心としたレジデンス含む創作活動を通じた作品の発表を積極的に展開している。

「ERTIBIL BIZKAIA 2020」受賞アーティストとして 2021 年の来日計画であった。コロナによる渡航制限の緩和を機に、2022 年 7 月～8 月 2 ヶ月間の日本での滞在制作活動の機会が実現した。

遊工房アールスペースでの 2 ヶ月間の滞在中、STOP-MOTION/TIME-LAPSE、音楽、ドローイング、彫刻、コラージュなど、初めての日本での創作活動を展開、特に、STOP-MOTION 撮影は、遊工房の近隣、渋谷などの都心、江東、築地など湾岸部など、昼夜にわたり熱心に活動した。いったいどれだけのコマが収録されたのだろうか？帰国後の集大成作業に期待したい。

7 月には、同時期、女子美 AIR 滞在制作のナタリア・サアレス(Natalia Suarez)と共に、女子美での学生交流、ワークショップも積極的に参画、8 月には 1 週間の瀬戸内、京都など関西アートシーン散策等、充実した夏の日本滞在中であったと確信している。



・アーティストトーク with ナタリア・サアレス @女子美 AIR

2022 年 7 月 25 日(月)14:30～16:00

女子美アートプロデュース表現領域 3 年次の学生が司会進行役となり、Natalia 氏と共にアーティストトークを実施。YouTube ライブストリーミングで配信された。

* youtube 配信動画リンク: <https://youtu.be/PtzOyhrP4Gg>



・オープンスタジオ@YOUKOBO

2022 年 8 月 27 日(土) 12:00 ~ 19:00



Dystopia

ダニエル・ラリア Daniel Llaría

東京は結局のところ巨大なメトロポリスであり、日本を知るためには地方も知らなければならないと達彦が言ったのを覚えている。JR パスでの関西旅行から戻った時、この都市は地方の町よりもはるかに厳しい印象であることから、私も全く彼に同意した。

私は日本版の新自由主義の大都市を 2 か月経験しただけなので、あえて日本について推測することはしないが…。東京は多くの点で私に影響を与えた。特に私の心に突き刺さったのは、東京が醸し出すディストピアの感覚だ。これはおそらく、私の視線や芸術が、労働、アイデンティティ、そして新自由主義が身体を搾取する無限の方法に焦点を当てる傾向があるという事実によるものだろう。

祖父が農民として暮らしているバスクの山間地の故郷で始めたストップモーション作品を、東京で続けようと考えてやってきた。私のアイデアは、これら 2 つの根本的に異なる風景と文化を並置し、主人公が場所、文化、職業に属することの意味について明確に表現する、相反する物語を作り出すことであった。

私がアニメーション化するキャラクターは、昔の鋳物の大鎌で、始めは先祖の労働とアイデンティティの象徴であったが、今は、それを型取りして作ったピンク色でぐにゃぐにゃしたものになっていて、私の労働と私のアイデンティティの象徴となっている。

このプロセスと並行して、役に立たなくなった作業服を使ったシリーズの 2 つの彫刻的なインスタレーションを制作した。クリエイティブな仕事の性質と文化産業におけるビジュアルアーティストの役割は、生産チェーンにおけるより明確な役割を持つ他の形態の労働に沿って設定されている。

以前の作品ではブルーカラーや肉体労働が中心だったが、ここでは東京の街角で広く見られるホワイトカラーの従業員を取り上げた。このホワイトカラーの作業服は、首回りが黄ばんでいるほどくたびれている。

このインスタレーションは、不安定さと威厳の間の境界線をたどり、粉々にされ、搾り取られた人々に対する一種のアンチモニュメントであり、歴史のより大きな物語とは無関係な、人々の経験の証人であり、壊れやすい彫刻として作られている。



Photo by Daniel Llaría

Young Basque Artists' Residency in Japan Part 3

A Collaboration of AIRs and Universities 2022

バスクの若手アーティストの日本滞在制作の活動記録(その3)

AIRと美術大学の協働 2022

協力(順不動):

スペイン・バスク自治政府ビスカヤ県文化部

女子美術大学・アートプロデュース表現領域研究室

JYOSHIBI Artist In Residence

発行者

遊工房アートスペース

寄稿

日沼禎子、ダニエル・ラリア

編集

村田 達彦、村田弘子

翻訳

岩間香純、村田達彦

写真

ダニエル・ラリア、JYOSHIBI Artist In Residence、遊工房アートスペース

発行

2022 年 12 月

ダウンロード DOWNLOAD 本印刷物は、「MICRORESIDENCE !」遊工房独自出版物シリーズの一貫で作られました。webにて閲覧・ダウンロードができます。

This booklet forms part of a series of publications by Youkobo titled MICRORESIDENCE! Digital versions of back numbers are available online: www.youkobo.co.jp/microresidence

© Youkobo Art Space 2022

Youkobo Art Space

Zempukuji 3-2-10, Suginami-ku, Tokyo, 167-0041 Japan TEL / FAX:03-3399-7549

info@youkobo.co.jp

www.youkobo.co.jp